



1278
13



朝夷巡嶋記全傳第三編卷之三

東都

曲亭主人編輯



中輯第廿五

色界の孀婦鳥
欲海の和尚魚

義邦のその性温順なる一朝の怒り乘りて黒菽を打と日來りわぬ
 挙動は似れども志と心なる平人非理非義をわぬ忍びざる怒り
 況この君伶俐なるも嵐尚二十は足らざる十慮の一失さるる程か
 詰且義邦の疾起る黒菽が氣色をさるよその款待日來は變らじ
 絶て怒るものあらはせしどなや謀るものも一点も心を放さず是より
 毎日進止を試るよあり得ざるなり一原來この老女が一筆は
 後悔して行状を改める欲するんまのれのを標吉の亦幸ひかん

1278
13

月夜二編巻三

立會ひ昨日標吉が御寺へ参りしと死なむの帰院のよきとぞうりし何の程や
 歸るもひしよろづは富く賑ひ國府の水が深ゆるやうんさても若ぬ
 むひまけを逗留の久かりの彼処の後家達を蕩しつと面白記の
 のとなりけんあなれとと笑まうら背を破と敲著れが塞玄の半
 脱る畜と見しとち笑ひ國府の富ても賑ふも彼色界の不施不捨
 縁ぬた女人の度いごとく立ちへりてん男が顔をもよくほり
 むひりごとそれも是も黄金佛の利益なれば錫を振る勅化は月を
 累つ昨夕の暮く帰著せり長途の疲労ぬたあつ後どおづとや
 むん身もあせんとして一周忌の日向がてり其方を抜く折ふ記
 む逢ぬ記といへば黒藪四下をえり是首の府彼首の縣を待渡記
 勅化は日を送らんや黄金佛の建立ぬ捷徑のりしを信れといひ

うけくおの声を潜り彼骨相書をめて素らと互逆人吉見義邦
 標吉は舊縁ありとて四月の比よりぬを込れ縉紳のゆる果と
 いぬむり人を使わく檀那態面へ憎なれども標吉が佛ありと
 庇を貸く母屋を取らと寄食人よを措く絶て頭を擡得と積
 吾侪は恋慕してとろく袖を引くもう海さし源氏の君の後弟でも業平
 朝臣の弟でもん身を捨く仇く弱冠を何ふまき度むなむと
 うゆさよあ随ふ罵り懲りて辱しぬれぬその後にも足も得ぬと
 寝首撥くともやとあひ過せ背がらされて夜とてやまへの馳り
 ころ村の長もあ領主の館へのを遠く許ぬも女子の甲斐あり
 標吉の甥あれども虚と大事の相譚をぬへる危く形もぬんが還り
 むふ日を待まびてゆりしといひあつてあり一夜のまが僻りを彼君よ

大草子ノ事



塞玄

黒萩

玄ボリ



黒萩
途
塞玄
あ

黒萩

草子ノ事

あり附ら目尻の涙をきり拭ひたり。塞まて眼を睜りしもの
 慮外の珍更之彼義邦へ謀反の骨張経仕が与黨あるは平泉の柵ゆ
 入らで其許の宿所は躲れ居る。おん身は心残まばあ人同類ことも許稟
 さば則その身の罪科を免く賞祿とゆるべしとわれ。おん身は一旦舎蔵を
 被奴を搦く献ふが答あるに該へるれど年々くとも撃術早技本更の
 いもご揃らも毛を吹た疵を求めあは後悔其処は立がごし由断りて
 潜びより首取ておん身は遮与さん然とて時日延さるご今宵おん
 翌の夜よといひひけ耳を引よて密語ばらち領死七人の一周忌
 七日の殺生へ好むべきりぬねども。晡時が過れば精進を落ても
 憚りたご墓奈とゆとゆらよあより還らば疑わん彼冠者が臥
 房の案内今宵の暗号高外よひ死すの駭れども路辺ゆてハ

それも便か。おん身も中寺へ共侶は誘ふとて香深の法衣の袖を
 引けば引もせお小松原ゆらぬの日と戯れくらち譚ひつ伴ひたり。
 是より先は標吉の黒萩と追懸く走ると三四町迫るるに養母ハ
 道次は立在て法師は物をゆゆめて懸て樹下は立會ひ額を合して
 密語形勢あらぬごらひいへ間道を遠りく後方は近づき身長も
 餘る尾花が袖は躲れて一五一十を中吉見冠者を殺さんと相譚は法師ハ
 塞ま去歳より養母と情由ある人の聚語の耳は入もごらるべしハ
 多ひはやこれ只天魔の所行ゆべし。譬は冠者の性ごとく五十五進地人の
 母の肉あらとけぬらんや。是ハ決りくご母の冠者は調戲あはせし
 懲らせあふふく然とて悪心を發せしあ人これあはして彼君を害す
 るるあは月が心を盡せし甲斐か。是併古主粹殿及父母の亡魂が

養母は珠教を遺れざる吾儕を導かぬひりやん。さていふ事んとむる。
 或ハ呆れ或はうゝ頭を傾けよ。又た瀕は嗟嘆をうけよ。かく標言ハ
 困どてかゝる途に。さるぬかき思惟の思意ありとも。養母を頭とよ
 忍びがく。いざしく彼君を落さん。のどと深念して。其処ありて。く宿所小
 還るが義邦うらぐ。遅うり。途ゆく追著うらめ。と向きく標言點頭の
 又立度。諸折戸を内より。楚と鎖し。裳の塵埃うら拂ひ。義邦のほろへ
 参り。愀然と。稟ひや。母の追著ぬ。を。と。さ。る。ぬ。途。め。く。大。意。を
 竊聞ひ。此君の処を。り。あ。る。隠。ま。と。ま。れ。と。人。は。あ。れ。く。被。此。の。悪。棍。ホ。グ
 今宵更。蘭。潛。び。入。り。撃。ま。し。と。謀。る。之。速。ま。その毒氣を。避。め。ん。危。り。之。
 あ。れ。ど。も。日。の。没。ま。む。い。れ。も。稱。ひ。ひ。び。某。甲。夜。より。外。は。く。兒。郎。導。仕
 らん。この駒形を。山。踰。り。玉。造。の。り。と。落。さ。せ。め。と。の。と。れ。某。ハ。尼。沼。川。の。あ。あ。と。

中君を待たり。牙齒の松の邊を。送りつけ。な。ん。是。より。賀。美。郡。至。り。山
 又山あり。里稀。案内と。あ。る。もの。ハ。究。め。く。迷。ふ。難。処。な。れ。ど。も。あ。あ。て。地。理。を
 説とも。益。り。曩。之。母。は。領。あ。ひ。沙。金。を。も。ゆ。ひ。納。戸。の。鍵。ハ。親。あ。り。の。り。
 腰。著。て。お。れ。目。今。ハ。不。便。く。それ。も。甲。夜。の。程。よ。そ。返。り。進。ら。せ。た。と。
 真立。密。語。ハ。義。邦。さ。く。う。ら。驚。死。原。来。ま。が。う。ら。あ。り。け。る。よ。か。く。ま。が。く
 命運。縮。ま。び。逃。れ。く。か。べ。し。され。ば。そ。田。夫。野。人。の。よ。ま。か。ら。ん。を
 無念の。り。と。う。く。運。を。天。は。任。し。て。其。許。の。教。は。隨。ふ。り。又。黒。菰。領。け。り
 沙。金。ハ。月。来。寄。宿。の。料。と。お。ひ。ひ。と。実。ハ。渠。と。一。之。盤。纏。ハ。腰。に。餘。り。の。り。バ
 あ。あ。の。の。り。懸。念。を。せ。今。ま。も。ぬ。汝。が。忠。義。落。涙。禁。め。難。く。を。感。謝。す
 堪。ば。よ。ろ。こ。バ。一。身。一。命。ハ。汝。に。任。ま。さ。き。と。い。ひ。て。標。吉。額。を。つ。た。
 世。が。せ。し。を。ハ。一。ま。も。の。陪。臣。の。子。の。某。を。ど。が。お。ん。目。前。へ。も。ゆ。き。ん。や。落

させぬふは死くまじく後ひきまらるれどもいふおせん養母を捨てまらる
 不義に加痛某も物く宿所は還らざる警の追ひ速かくな
 料をど宣ひまらるるを老るる各あつものあまは養母もよこあら
 ぬさして後返一まらんまうりともこのまを今親あ告ぐこ一あひくは
 起行の由あらるるへ肝要あんと密やると相譚ゆ程は秋の日あまは
 短くて未のあもまを過さう今母のうり来ぬん氣色を曉られぬ
 ちのひひつ立て諸折戸を開く外面うらなながめいもくくと柴小屋は掛
 う草鞋引らう一此彼と擇とつ石は推當打やけけして締を融一を
 け程は義邦も笠の紐の断離らと結びあまく竹縁の下は隠し置
 身の西く後とあつちも又標吉がどれい得がさ一母あ秘まといひつぬ
 黒萩謀る所あつて怒る氣色を頭さる飽あまれは油断させ潜よ

里人とうち相譚ひ害せんといつあべい。さ身を明く地は告げてまれば
 救んとあふ標吉の孝あして且忠ありまれば足利あり一日不憶井平が
 資より危窮を脱れ今又あふ標吉が忠義は仇を避るといへども
 彼ホと始終を共まあぐ一皆薄命の致ま所うち歎くとも甲斐あつと
 あひへして出べたうとぞんくおんま立あへば標吉の打和げらる草鞋の
 續松よ燧火繩ととり添く義邦のほとりまよて来つ君ハ暮果て後よ
 厠へ登やうゆて背門のうらより出ぬ某ハ先さちて尼沼川のあつては後ん
 出後れあふかと謀あはせく草鞋と續松を逃与よあふ義邦ハ遺
 その誠心を歡びつえくこれをも笠とりの共竹縁の下は置標吉地境よ
 柴をこし燃く夕膳の準備をまら程よまや黄昏まかりよけり治処は黒萩ハ
 遠く帰り来つ折戸を推く進ま入。寔の下は裳を寒く足の塵埃を

洗ひ流せば後ひ来つゝ悪僧塞玄懐中の一口の戒刀を隠し襟巻に
 めく面を包み樹牆の間より地坑の傍より坐し義邦をんる程に
 黒萩竊に指し示し更よを抗頭を掉その意を示せば塞玄はいく
 づびとかくらち點頭今来しとて退如ぬ當下黒萩ハ水田を求食鷲の
 如く隻脚習は引揚て跡を拭み程に標吉ハ門の戸を引よんと立出つて
 母にハ還りぬいしと呼かけられて黒萩ハをいと答て進入り頃日の日の
 短老女の歩の甲斐あてて急ぐとほほど黄昏よりそ彼君ハいくまどや
 とみ間義邦ハ掛燈蓋は火を点し途の疲勞を向慰ゆる氣色よのまハ
 黒萩ハあら竊に歡びて他更あはぬ由は挨拶をかくて夕膳も果し六
 標吉ハ養母よのあやう一周忌の料供よとく里の甲しは物を受かぐらふと
 いのれと謝礼を述べ翌と受ど生活は障あり甲夜の程よりそらうらち

遠ら玄中の左側より還るべし疲勞ぬむよく鎮しとをく睡り更といふ
 黒萩はくちあやう義邦を結果るは標吉が宿所ありてハ熟睡するとも
 影護し是のまぐ心くるとなりしはまらけりとかのどし。玄唯天の祐よそ
 歡し心ゆの勇むを笑顔よおだく。その一段のみありや三日佛度は
 拘ひて生活を闕するは翌ハ殊さう半日の間もを惜りぬべし秋の夜
 長此此あは心のどうは相譚くより天明く還るともん身の保養よ
 ありあふ吾侪ハ何ともおんねことくくといとせば標吉ハ擔裏ハ松とり
 ありせど火ハ点さば熱さる里の中あは是かくくもとあへどもけしハ九月
 廿八日のと暗々れば更にく還る為中と肩よ掛さる吾侪ハ早く来ん
 とく就寝ぬゆとゆひの母をえらうて義邦は目を注され冠者もさる
 面色よせし立て遣しける標吉ハ一町あり歩く竊に引くし樹牆の

蔭軒端もどく。檢れどもそらうらよ立潜びて家内を張ありのもか。然とよ
 かほ早かりとあへば有繫去るのく。背門は立又前門は立在外か。義邦は
 守護はる。一時許遠寺の鐘声幽ま。既初更を告歩も。バ
 今ハ冠者の出あめ程ハあ。とあめあん猶彼此と窺め。怪とあふ
 りもか。なれば僅は心をや。く。尼沼のく。赴地。是より先よ
 黒萩ハ標吉を出し遣。く心か。め。か。れ。も。二。が。相。譚。ハ。法。師。あ。く。
 武藝あ。い。と。疎。かり。又。その。齡。も。五。十。は。あ。あ。ま。ま。バ。擊。漏。を。と。め。と。あ。く。
 所詮冠者。酒を浮ひて酔臥。く。寝首を搔せん。ね。あ。計。略。の
 亦あ。べ。と。較。計。つ。佛。更。よ。あ。り。く。里。人。が。贈。り。酒。を。煖。く。看。る。
 監梅。これと義邦。勸め。く。い。あ。う。曩。よ。か。の。が。僻。り。て。殿。の。氣。を
 蒙り。あ。た。勸。解。ま。う。ん。と。あ。ひ。あ。ぐ。標。吉。が。宿。所。よ。れ。バ。影。護。て。あ。う。い。

ぞ。面皮の。と。厚。老。女。と。思。召。れ。ん。恥。く。を。傳。ふ。れ。賤。の。男。が。所。為。
 と。て。鬨。詩。せ。果。よ。中。直。り。と。く。盃。を。ほ。つ。と。の。傳。か。れ。それ。あ。あ。く。ゆ。ど
 過。り。夜。の。う。さ。ら。は。滞。あ。つ。と。の。盃。を。奉。る。を。あ。へ。あ。く。遍。今。宵。限。り。あ。
 又。更。よ。禁。酒。く。身。の。慎。を。肝。要。よ。心。ら。ま。ま。く。仕。ま。つ。ん。尚。う。く。あ。い。
 酒。せ。も。素。あり。寛。仁。大。度。の。君。へ。許。さ。せ。あ。へ。と。泣。声。は。只。管。賂。話。て。止。さ。り
 けり。義。邦。これ。と。う。ち。は。く。この。老。狐。又。ま。ま。を。魅。る。よ。あ。ん。ぞ。ん。標。吉。が。い。ひ
 つ。り。此。彼。あ。ひ。あ。れ。バ。つ。も。を。毒。殺。せん。為。う。さ。ま。入。解。く。同。類。は。捕。さ
 せん。為。あ。る。べ。これ。も。又。此。奴。を。謀。り。て。脱。き。去。ん。と。心。あ。ひ。あ。う。荒。尔。と。笑。ま。
 こ。の。改。り。も。う。き。を。受け。月。来。あ。ま。身。を。寓。あ。う。解。る。人。を。拳。し。と。若。輩。の
 短。慮。あり。後。悔。臍。を。噬。と。久。これ。を。か。く。の。勸。解。も。せ。め。何。ぞ。心。を。か。
 と。い。ひ。て。盃。を。奉。り。飲。や。り。あ。く。席。薦。よ。濕。入。ら。せ。そ。う。あ。ま。返。し。あ。く。黒。萩。ハ

あつちのうらと會笑つて盃をうち戴けは義邦はいで酌をとらんとして
 溢るもめでは篩あひ黒萩のこの十日あがり酒をバ絶く喫さうと今
 その香を聞その味を味へは舌も蕩るをうりよおぼえて。餓鬼の如くは飲
 盡しの又義邦は勧めけを義邦はふくも酒を嗜されども既に毒を
 試さければ只この老女は酔せんとも軽く受つて扱あへは黒萩は我を忘れて
 盃の数をさうり眼中濁りて舌もまわつて義邦もいづらう酔らる如く
 膝を崩してそがほらう。肘杖突た黒萩よおん身は何とあゆみ入裏突
 られ候てその実情をあつたれば心の中もあつたぬをさうと。おん身は腹を
 立てらう。これ其のあつた妻もあつた。おん身も亦媚婦の齡ハ相應らるは
 とも世は絶くあつた。おん身は悔しさをあてけり。このいれく黒萩胸
 うら騒ぎその宣ふを悪言あつた。おん身をあつてくえうと。おん身を欺く

べたおん身が吾俯を欺くのこがあつた。解さるの堪く。罷くむと。睡
 らんとひるひて身を起さ。黒萩睨く推禁めいんとまれば又さう。お
 塞ま。約束あり初まりこの君のう宣ひ。いづれ何を恨ま。人を
 相譚ひ害せんとおく謀るべた。うらとそを告らる。告げの今宵彼
 人が潜び入る。郎を殺さん。おん身切く密更を白く共侶よ走らん。おん身
 密更を告さう。おん身愛も想も弾果く吾俯を伴ひあつた。うらとそを
 夕を多てけり。悔の八千とび百十遍尋思。服あつた。おん身合して拜む
 の。宵をうらとそを。酔も巡りて泣沈む。義邦是をいん。うらとそを
 臥房は起たう。且して黒萩の頭を撞きん。おん身悲や。郎は給たう。
 一緇の陳腐と独酌は復五六碗。乱飲盃を扱捨く。隻膝立て。沈吟し
 再三にび考ても偶靡く男郎花彼遍昭は折せ。おん身今とそを。おん身の花をか。

過夫と賄詰密議と告ぐ今宵郎と共走らん然るを膝ふるを掛く
立ちぬれとも跟く踏く躑たあぐ義邦の枕方は近づく程よと周々を
搔搜る義邦立ち傍に在り引つけく遣過し背を礮と衝く
黒萩の檜と音く蒲團の上は倒るる酔うりの癖は下へ
倒れく遂は始記に睡るが如く死するが如く鼻息のそ高かりける
義邦はその酔を久く有せ為る黒萩が頭より衣ふくうり被く
臥簞の下は隠るる脚半の紬を結びあせ刀を取て腰は帯溜ゆる
戸を推開く竹縁の尻をわけ草藁を穿燧袋を腰は著笠をかき
松明を携く黒白別ぬ暗地夜は標吉が誨る路は其処うとほつる
尼沼を抜く出ぬへ夜は亥の時ひなりなる程は寒玄の寝よとの
鐘を途でつ時分ひると標吉が軒端近く潛るく内のやと張る

寂寞として人定り南面の竹縁あり雨戸を細く開くありこの小房の
義邦の臥簞こと豫て穿り去歳をせりくる家の案内はよく
知るあり入ると黒萩が戸鎖を外しうろろん首尾好ことありよ
點頭且縁頬ふるを掛く伸上り又耳を側く内は熱睡せしを知けん
身を横めて閃た入り水は戒刀を引技剛めく搔搜く霎時寢息を
窺ひて是ありけりと多ひ決めく左は被る衣を拊胸のあうへ跳蕘く
豪藉も徹すとと刺を刺まきく忽叫苦とむくりは魂滅るを立さ
せはあ随は刺苗く懸く首を搔きりける當下塞玄ああう嚮よ
黒萩が標吉を甲夜の間に謀りて宿所は在せどのひはなれども
立かへりて厨のほろろは臥る軟這奴が覚るハむぐかんとありハ更よ
黒萩はあくるまよ及せし血刀を拭ひ納め首級の頭髻引提て鳥夜よ

紛々々々走去り。かゝる一程は標吉ハ尼沼川のあちこち立く吉見冠者を
 俟程は半時あまを過せども義邦の事も来びゆく先より暗夜
 あれば山路は迷ひあつた後れて悪僧の毒は火あひつた也斯と
 あつた何時までも門辺は立く俟べり。養母が曉るとりやとあひ
 過しのせられあは冠者を苦しむをわづらひ心むと申と申さうとあつた
 遠く燧をとらゆき携来つる松明は火を移しおのが家路は引くへも
 途まがら油断せぬ冠者ハ後欽先欲とて前後左右は眼を配りて来るも
 あつたが家迄百歩は足らぬ小段道九折あり樹下を遠く歩行合は塞玄
 礮と逢ぬ標吉ハあつ照を松の光は信とて包ミ癖者が引提し首ハ
 養母ハ吐嗟とむり驚怒とあは癖者親の讐其処を退とて呼首は塞玄も
 亦火の光は取り首をとらぬとて錯誤とて懸駈は引提し首を

ろち捨て逃んとせれば標吉ハ奮然として松明投擲しを晃と打振る
 背を一刀丁と砍る砍られく落る頬被脱ぐとやあひは塞玄も戒刀引
 技は一声嗚り切つるを受や打靡し怯む処を蹴倒し起んとするを
 一撃は首打落し息を吻死又松明を少照りく仇人をえれば塞玄
 ありこの悪僧ハ吉見殿を害せんと謀り。これハ正しく竊せらるる
 あつたが母を殺し去らんとあつた裏面の申すもえんやとく
 馳く宿所はかへりて先義邦の臥房をさつた養母の死骸はくま
 あり。松明を接滅し納戸の行燈引提し家の四隅隈の陰
 外は絶く死骸もあつた燼は盃盤狼藉し。原来冠者ハ美
 落あひは疑ひあり。自業自得といひあつた。母ハ何の故に臥房
 かへり冠者を代り塞玄は撃れあひ。中へり。母ハ何の故に臥房



明處
有王法
暗裡
有鬼神

標
吉

塞
玄



色中
鬼人
夜間
叉

惡僧
塞玄

醉臥せんといふ酒を勧めみづから解く彼君の臥房は迷ひ入るを塞ぐ
あつて冠者ありとあひたり。母を害せし秋母の不幸の酒の
恩は悖り義は背き吉見殿を害せんと謀り。邪怪の因果親の
責をわきまぬ。かく故主を救めても親を人殺す。吾情の何れ
のぞきまを。哀しやと養母の首をうけ抱死潜然としてうら
歎く涙は間へあがりけし且しく心を鎮め吉見殿へ恙なく落さぬ
否とあつて是もあつた。既親を人殺す。又仇を
撃つればむん迹を慕ひ。當処の村長を誰とあつた。許さ
當郡の領主莊司殿へ理非明断あり。慈悲あり。と風声。夜に
夜へのと長蛇比あり。今より領主の館へ参らば曉が。必到らん。
仇討のう免許をほく罪せし。後には冠者の往方を索ん

町ありあり。とひとりごとく。舊の岐路へ走り行後の證據と塞ぐ。戒を
拿鞭を拾ふ。首と共に携来つ。母の頭顱より添く。一袂は楚と負ひ
又松明を火を移して。門戸を外より鎖固め。星の光をうけ仰げ。夜は尚
亥中田舎道山田の畔に秋蛙鳴声高館の邊より領主の館へと出さぬ。
山神洞孔 夜雨
信夫館の隠蓑
中輯第廿六
さう程は義邦へ黑白も別ぬ。鳥夜あり。あつた。と。述認するも。影護さよ
松と燭さ。山路ふく。あつた。其処は。是処。秋と踏分る。行ども。あつた。
標吉が教。一川の上。あつた。登り山を下り。あつた。彼此。あつた。
遠る。あつた。徒時を移し。身。あつた。疲勞。あつた。火を。あつた。
松より。あつた。照。あつた。進む程。夜は。あつた。比。あつた。深。あつた。秋の。あつた。

かく雨さへ俄頃降るぞ心も共は松明の光もあま滅んをかくるハ
 進まざりしと聯て樹蔭を索るはこの処巖ハ高く松瘦て枯れん
 茅萱の下はいと絶く虫の声を在斯やくての山間ハ廣やうある洞
 ありて左右の岩よいとゆるり注連懸りたり義邦を思ふべく願ふ
 この洞の中ハ山の神の禿倉わらんあやしく雨を避んとく進み入らんと
 此の松明の火ハ滅果たりそのとれ裏面より声をうけく来つるを
 誰と問ふものあり義邦は驚とくく原来この石室ハ山賊の巢
 ありたり運の窮と覚期しかりくようちも騒がせ刀の鞘よを掛く
 兩三步進み入りこれハ是行客こまうの女何れものぞと問うされく又裏面より
 これも亦行客こまう山路ハ迷入りてこの処中ハ日ハ暮り既ハ今宵を
 周夜も六六麓下りぐたを掃りて天の明るを俟といふ義邦些おち

おこれども猶欺詐さしとて一点の油断せざりしやん
 猛獸蛇蝎の患わらんや火を燎らめと詰問ハ寔然ありいふ客ん
 今朝山河を渉せしとれ燧袋を遺せし術可と答たり義邦は
 火これ燧も松もわり雨は撲れく滅らるのといひく燧は
 火く火を打よいと湿やうわれが早中つらびとく焼くは松明
 移しつ是を左より照らし右より刀の鞘を握りく洞の中へ進
 入りしをその人のほろり立き迷面を對せれば彼人もや声かけ和君ハ
 冠者よとてと問はく義邦睛を定めしむこの行客ハ江三二
 廣光ありといふかとむりは歡びあつた主役ハ涙を頻はくさる當下
 三二廣光ハ遠く居替りて主君を上坐し居まぬせりひけ
 見泰は入りかへハ孰を先へせりや曾のを踊りてかきくは辨りること

如く併廣光が月來の念願空しく悲死尊顔を拜し
 歡びの言葉も迷も竭しごとくも君は彼夜う井平を
 るり多ひく後眉を憑りて山の中も迷せぬ心
 當國への昨けみ立入らせ多ひ秋又外よん隠宅を
 身も摘く推量りも艱苦もさそひひけくさ
 義邦も鼻うらむと現命わり時わく圖りたる再會の
 かとさかりあかこの春三月三日の夜故郷を逃去り
 勝澤の松原ゆく間を追兵よ迫首とせられの後陣を
 立別も間遙はなりく遠は渠が存亡をあらは後れ
 及ば直よ加賀も赴死朝夷はあんとく佐味が宿所
 去歳の春より鎌倉に在りといふこの故は義秀が

進退其処は究りて且く小松も逗留せられ汝も亦来
 陸奥へ赴死しあわらむとあむりとよはがゆく川尻
 高船も便して四月のちあまこの陸奥あり尾崎の
 疲勞大りかた且く旅宿も杖を置く更も高館を
 玉造も判官殿の墓をぶのわさよ駒形山寺ゆく
 馬娘標太が一子も標吉郎といふものも避連し渠
 おどろ世を潜びりよ又一朝も禍起りて其処も足
 標吉が教うる尼沼のうへへく眺く脱れきれもいと
 迷ひくさしてゆく川辺も到らぬもあまの雨が主
 処もあまのこの洞あま汝も逢し入寔も寺にこの
 先考の導死あま欲勝澤の危難も雨もあまく媪子

又雨よあつくとひひりけなく三二は逢ひぬ禍福へ猶も縁の如くと
 古人のいへり吉山倚伏の測さくくど浅良井小三二の恙を汝はど
 當國は潜居すと知く来つる汝井平の逢りて汝が生死のあ
 ぶらやと過來しつるを告あむを侶を忘るぬ誠心の廣光もく感佩し
 或の歎び或の憂ひてあむ太息を吻に天飛鳥の鶉の啄大くこなるを
 湘語への風雲環會は難く其痛きを負せしと速よ小松に到らば
 彼処ゆくあひまうんは悔し死の只病著こそその故の箇様くくと八嶋室平
 ホと防犯留ると死必死を朝夷に救れし是より先よ義秀の蒙二耶
 相譚く浅良井小三二を越中婦員の岩神の稀向判五許遣せり
 又義秀の去歳の秋稀向は宿かりく思人一三は再會し已てをぬむ
 判五が女兒友鶴を娶りし又義秀の今茲の暮下總へ赴はく更よ

下野よ来ると夕赤貝の里を過りて浅良井と對面し冠者の危窮をあり
 り又廣光の義秀と相伴ひその日大石の山越し上野よ出信濃路を
 来ると死廣光が金瘡腫痛く中途は日をたしし小松の旅宿はあり
 と死追捕の沙汰嚴重なれば義秀は扶掖れてかくく旅宿を出されども
 進退窮りて志あふよ自殺せんとしつるに義秀は禁められ又彼二三蒙二郎
 亦が冠者と朝夷を迎とんとて行轡を早し来つるは環會衆人よ諫られく
 心あつても岩神へ伴も義秀の冠者と井平を索んとく駭て其処あり
 立別を信濃近江をあろがしと赴くよをその夜より一三は空しくあむを
 巨細は物ごとく又いあや某の父子夫婦あひわけなく稀向が扶助よ
 よりて露命を繫死贖判五はまが良薬を求め必死の金瘡
 七月に至りて大くあや平愈せし冠者の兒在所を索せしんと

多ひ決りて。あつ方位を占せし。全くこの陸奥に當り。よりて。箱向ふよ
 辞し。別れ商旅。お打粉。直進。進。當國の封疆。入りの。八月の。り。こ
 越後路より。来。ま。れ。あ。つ。河沼。迎。り。耶麻會津大沼の。四の。郡を。編。歴。し。
 安達。の。原。安。積。の。沼。信。夫。郡。伊。達。よ。刈。田。柴。田。名。取。の。片。瀬。川。宮。城。野。の
 萩。未。枯。の。岩。の。躑。躑。も。春。よ。似。せ。奥。へ。と。色。深。紅。葉。を。幣。よ。是
 首。の。神。彼。首。の。社。へ。願。言。へ。と。君。よ。あ。い。せ。玉。造。賀。美。栗。原。の。山。里。よ。日。敷
 あり。ゆ。く。露。去。れ。露。け。死。途。も。長。月。の。ろ。い。う。あ。つ。吉。日。ゆ。く。君。恙。を。死
 見。泰。の。本。意。を。遂。し。五。十。四。郡。の。主。よ。あ。つ。福。ひ。あり。あ。お。有。ぐ。し。と
 歡。び。の。天。地。よ。満。る。意。氣。揚。々。忠。信。あ。り。頭。れ。う。義。邦。熟。う。ち。使。く。
 原。來。朝。夷。約。を。違。へ。ど。この。春。吾。儕。を。訪。ひ。る。よ。只。そ。が。危。窮。の。と。死。よ
 あり。く。對。面。を。好。ざ。り。し。遺。憾。死。限。り。あ。れ。ど。も。既。に。廣。光。一。家。を。救。れ。と。の

勇の蔭に寓し。あひうけ。死。恩。惠。之。彼。人。の。加。賀。よ。鄰。る。越。中。婦。負。よ
 あり。と。あ。つ。終。皆。小。松。へ。と。走。り。し。今。更。よ。身。取。死。す。死。さ。る。を。亦。死
 故。よ。彼。人。の。難。を。犯。し。危。死。を。忘。る。ま。で。果。死。逆。旅。よ。あ。つ。心。苦。し。死
 り。よ。あ。ん。又。蒙。二。郎。も。信。あり。義。あり。さ。ゆ。め。の。と。も。あ。つ。死。渠。の。宴。お
 向。上。り。さ。く。と。駒。形。村。よ。あり。一。日。の。り。ち。ゆ。い。へ。が。如。此。く。終。の。箇。様
 箇。様。と。と。く。標。吉。が。忠。孝。黑。萩。が。瑤。濫。彼。と。あ。つ。此。と。如。く。一。五。一。十。を。告。也。が
 廣。光。頻。よ。驚。嘆。し。わ。れ。が。標。吉。郎。と。や。ん。も。亦。ゆ。が。死。の。義。ま。よ。し。を。い。へ。
 君。ゆ。く。所。よ。し。と。祐。あり。御。同。運。も。ち。死。な。あ。ん。天。も。明。バ。死。供。し。と。あ。つ
 越。中。ゆ。で。退。く。べ。箱。向。判。五。の。富。と。い。へ。ど。も。その。志。名。や。死。を。愛。し。と。義
 あり。信。あり。朝。夷。逆。旅。よ。あり。と。い。へ。ど。も。終。の。勇。の。家。よ。か。へ。ん。究。竟。の。も。ん
 隱。宅。岩。神。よ。あ。り。の。中。と。只。管。よ。勸。め。し。義。邦。の。議。は。後。ひ。て。天。の。明。を

待程は雨の中やぐ歌より。かき義邦の炬火を續くをせむく廣光と
 共侶はこの洞の奥をるるよ入るる一反あり雨と奥は廣光ありその
 中程の石と造るる赤倉あり多る扉の失せく神体ありあま住なる
 めのあり一吹焼捨る曲突あり床中もせぬ巨石あり山賊をどの住所
 趾あり又熊を撃獵夫をどの窟獵せし所吹と主程さゆくは評しつ。
 舊の処よかへりをればありの間より天ハ明く山鳥の声をありはくんと
 主程の草鞋の結びかえをどほ程よ忽地洞の外面は懸り人声
 あり柴は火を被投入れく焼殺せとぞ罵りたる主程はさくうら驚死んく
 やよ早とあり吾們の行客は昨夜の雨をよ避く天の明を俟るこ
 殺るべたりのよあり疎忽の舉動後悔ありんと諸声高く呼禁れが
 大将とおぼしきもの洞門は立跨と思あり山賊は徑任が逆乱を甘んじ

汝亦連屬この山の神の洞は穴居し昼ハ伏し夜ハ顯れ行客を刺し人を
 劫せり民の訟置りころよあつと曩よこれ領主の命を兼り擲捕を
 あつと汝汝ホとく逃亡れが且く兵を向られは後日を送りて再び之を
 来らるを搦り不意に誘く推寄りかたりは領主の御内よりあつと
 ありれら水草十郎昌甫あつとく索を被れとぞ喰りける洞の中あり
 主程はこれをさくおあつと驚死にける所さもあつとありれども吾們の山賊
 あり野伏あり疑くは物を俟く對面ありと叫ぶあり昌甫竊に
 冷笑ひありが懸兵を退んとく物よと呼れは廣光ハ先よ立義邦ハ
 後よ跟死洞より進み出る處を左右に待り兵亦足を拂く廣光と義邦
 打倒し矢庭は索を被りたるものと死廣光大に怒り蓬死んこれ
 舉動る吾們の只兩人に何を再三の問答も及ばば理不盡る擲捕や

その賊ありと賊ありと顔色言語よりともあべし疎忽と敷國ハ昌甫
 呵くとうち笑ひまゝ不敵の癖者ハ形を変名を偽り出段定うあ
 ざら賊ありといへばとて行客ありといへばとて輒く放ち遣へきや汝ハ
 何国より何処へ赴く行客あつぞ姓名いりやと問詰られく廣光答ふ
 迷惑し実を告ぐハ憚あり沈吟されバ昌甫ハ眼を瞪りし声をぬり立
 此奴ホとの出処をいひば姓名を告ぐらぬハ山賊ハ疑ひや裏面ハかほ
 同類あらん捜せくと下知されバ早雄の駭兵十餘人戦を引提半弓は
 矢を刺ひ左右ハ松明振照らせく洞の中ハ進み入り戦をり敵立奥
 おで隈かく獵求もども二人が外ハ物もあられバ食徒ハ退死出義邦を
 ちのめり微運を觀くと頭を低遂ハ再びのいへば廣光られをん
 して主君の心中推量もバ胸ハ碎けく腸も断離をむり藪せり。

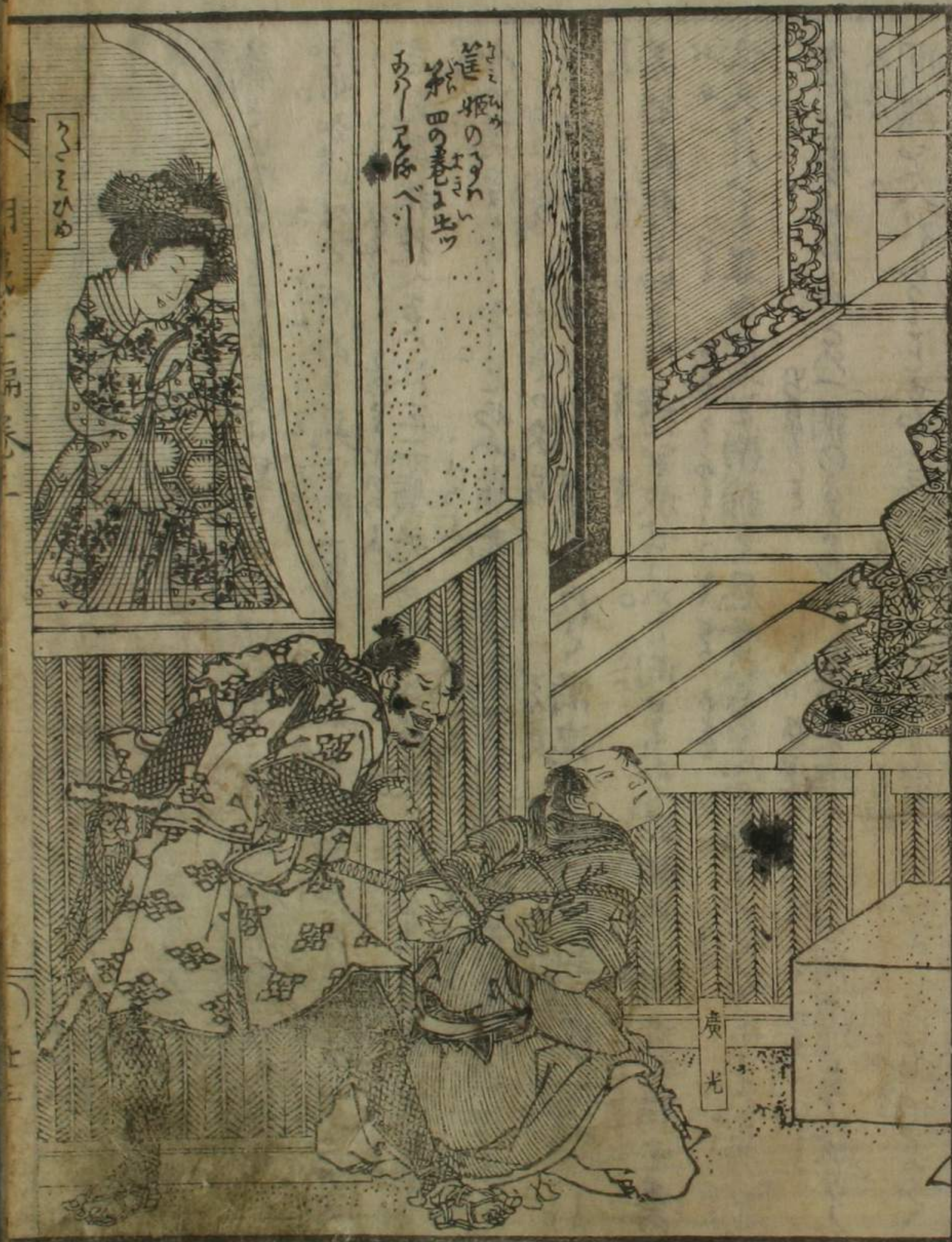
かくて水草昌甫ハ義邦廣光を引立させ趣合高妙とささめたり
 高館を望く還りたり抑本郡磐井の領主ハ故鎮守府將軍藤原
 秀衡ガ一族あり佐藤莊司元晴之と異同國信夫郡ハ在り一ハ
 信夫莊司と唱へり便是九郎判官義経の忠臣嗣信忠信ガ父ありき
 かく秀衡ガ嫡子按察使泰衡その庶兄國衡ホ父の遺訓ハ悖つ
 九郎判官義経を害せんと謀り比元晴ハ泰衡ガ弟泉三郎忠衡と共に
 争ひ諫もども聽れぬ泰衡竟ハ忠衡を殺し義経を襲て衣河の
 城ハ自殺させ鎌倉殿ハ媚れども頼朝これハ不義とてみづき泰衡
 國衡を征伐し合戦終日ハ陸奥出羽二國平然ハ実ハ文治五年
 秋九月あり泰衡その性殘忍あども元晴ハ恩を思ひ義ハ仗
 るは叛く石那坂の砦を守り大軍を防戦といへども大厦れ

顛えんとせんと死よよく一木の柱べきまゝあり元晴弓折き矢種輝て
 その身の遂は生拘らる泰衡國衡滅亡の後頼朝卿むらり元晴を
 敵くその本國へ還し遣し刺磐井平郡王造半郡を宛行へる是
 その義烈を感してあり元晴則高館の城迹に程近に圓山は屋敷を
 構生残るる家諫を招よ討死せしめれ子孫を扶持してとて善政を
 施し民は東作を勸るといへども近属大河太郎兼任が子修羅五郎經任
 厨川は起り平泉を略し鄰郡を攻動し乱妨狼藉大なりとあり後良民
 農業を安くせし離散せしもの多りけると云れども莊司元晴ハ防禦の
 軍配間断なく主従郡民力を勸しよく境を守りしに經任は間近に
 平泉ありかぎり磐井玉造を犯しぬむ竊に隙を窺ひたりと程は信夫
 莊司元晴はいぬる比より玉造の山中は草賊隠れ住むと云く豫く計

畧を旋り家諫水草十郎昌甫を大将として兵三十人を指遣し彼
 山賊を搦捕せんとしつれも賊は多くこれを知らず逃失く再びかへらば
 昌甫悞認く義邦廣光を搦捕り信夫の館へ帰陣しつ駈く件の主従を
 廣庭は引居ま書院のうま土圭轄とて未の刻音はかり且しつ佐藤
 信夫莊司元晴紋紗の天袖は縞の朽葉色の小袖を被り山施子孫の下襲
 金襴の袴を穿朱韉の短刀を跨おち韉の大刀を引提り屏風の背
 あり遠り出端近う布儲るる裯の上より登まら水草十郎止りと敬して
 索取の夥兵と共に頓首せり當下吉見主従の頭を擧ぐ元晴をんふ
 年の齡ハ七十有餘あり頭ハ士峯の雪より白く眉ハ楊柳の葉に似
 たり星眼人を射く威あれども顔色温和ゆるく猛り長者の風あり
 つましく胡地の人といふんえざりたり在此莊司元晴ハ義邦廣光をつらくんて

曲録を前より引直して汝の是徑任う支黨欽又亡命の小賊汝の名を何と
 呼ぶぞいの比より玉造多洞の中は隠住む疾いへ支んと曲録を撰遣
 信と疾視う廣光騒ぐ氣色かく領主の業驗甚錯へり某等ハ山賊
 名ハ又徑任ガ与類はあつた加賀國小松あり所要あり来つるの某ガ
 名ハエ三今一人ハ同郷の伴侶冠太郎と鳴くもの山路は迷ハ山路暮て
 雨を彼洞は避うの洞をいと隠宅と爲るものあつた陳れ頭を
 うち掉りのあつた偽のあつた今汝ガ語音をきよ北國のものは似む
 明く地は実を告よ首状せばやいつぞやと詰問も一世の浮沈義邦吐嗟と
 跪たん疑はものあり吾們加賀より来つるといへども生國も下惣あり
 結城ハ故郷はいとひ暗きうら微笑現さあつた人もあつたその男子
 伶俐げありこれ汝ガ摸様をうらよ一人ハ武士一人ハ商人と見えたり

是を伴侶といふと相應うらびあつた言語應答山賊は似む又當國の
 人と見え後ハ徑任ガ与黨あつたがうらを徑任ガ同類とせうらつた
 諛者の誣罔あつたれども亦その中は情由あつたあつたやと試問ハ
 義邦も廣光も忽ち宵うち騒だううへを早知りて欽とおつた目と目を
 注し又のあつたもあつたうら元晴ハその氣色をうらあつたうら點頭を
 あつた扇をうらうら水草昌甫を招たせうらあつた青あつた渠水ガ縛を
 釋放し索取ホを退せよとつたうら昌甫ハあつたあつたあつた
 かぐも音を傳へくその縛を釋せよ義邦廣光ハ又うら悪夢の
 覺る心地ハ莊司ガ胸臆を掃うらうら心ハあつた元晴ハ驚
 しが解捨る索を焼く皆退たあつたうら又昌甫を招たつ扇を口よあ
 當く密語ハ昌甫ハ目を突耳をうらあつたあつたあつた縁頬を左へ遣りて



退かたり元晴かく相計くまづり立ち義邦を招のりて賓席まをせ
 又廣光を招よせり。そのまじひらるる。又廣光を招よせり。そのまじひらるる。又廣光を招よせり。そのまじひらるる。
 蔵といへどもその氣更も頭る某へ眼翳と耳疎死稀古の翁はあられ
 どもかほやく所あり見る所あり。和君主後を知らず。包とあつる
 吉見殿相後へる江三廣光はあつる。包とあつる。吉見殿相後へる江三廣光はあつる。包とあつる。
 今の隠きまかりとあつる廣光は君の答のうを。和君主後を知らず。包とあつる。吉見殿相後へる江三廣光はあつる。包とあつる。
 かく現凄し眼力之明察せられ。慚愧は堪ば只訝し死の信夫はし。
 某を義邦と知りて傳を放せりと問せも之に疑惑は有理元晴邊塞の
 武夫れども罪ある人を捕捕る恩賞を求めぬ。武夫れども罪ある人を捕捕る恩賞を求めぬ。武夫れども罪ある人を捕捕る恩賞を求めぬ。
 かたをあらとわづらふ一朝のふらぬ。武夫れども罪ある人を捕捕る恩賞を求めぬ。武夫れども罪ある人を捕捕る恩賞を求めぬ。
 間諜と入れらるる。武夫れども罪ある人を捕捕る恩賞を求めぬ。武夫れども罪ある人を捕捕る恩賞を求めぬ。

穿鑿せし駒形の里人田丸標吉が宿所より他國の弱冠寓居をされ
 其の模様は如此くと告るをすくよい。冠者よよく似たりをほ巨細はあつる。冠者よよく似たりをほ巨細はあつる。冠者よよく似たりをほ巨細はあつる。
 冠者よよく似たりをほ巨細はあつる。冠者よよく似たりをほ巨細はあつる。冠者よよく似たりをほ巨細はあつる。冠者よよく似たりをほ巨細はあつる。
 あるものありて告るやう原へ鎌倉のあつる。あるものありて告るやう原へ鎌倉のあつる。あるものありて告るやう原へ鎌倉のあつる。あるものありて告るやう原へ鎌倉のあつる。
 有友が家親馬娘標太とゆれり。有友が家親馬娘標太とゆれり。有友が家親馬娘標太とゆれり。有友が家親馬娘標太とゆれり。
 とうといへり爰よのめくその弱冠は吉見殿あり。とうといへり爰よのめくその弱冠は吉見殿あり。とうといへり爰よのめくその弱冠は吉見殿あり。とうといへり爰よのめくその弱冠は吉見殿あり。
 けるは彼人真は徑任が一味と類あつる。けるは彼人真は徑任が一味と類あつる。けるは彼人真は徑任が一味と類あつる。けるは彼人真は徑任が一味と類あつる。
 柵入らるる何ぞ標吉が家より寓居や加梅修羅五郎間諜者を入り
 とも不知案内の他國人吉邦をりて。とも不知案内の他國人吉邦をりて。とも不知案内の他國人吉邦をりて。とも不知案内の他國人吉邦をりて。
 吉見殿の冤枉は身をあらう。吉見殿の冤枉は身をあらう。吉見殿の冤枉は身をあらう。吉見殿の冤枉は身をあらう。
 この故はこれの只あれども知らぬ。この故はこれの只あれども知らぬ。この故はこれの只あれども知らぬ。この故はこれの只あれども知らぬ。

近属玉造の云云の洞中は山賊ありとぞぞ一々腹心の老黨水草十郎
昌甫は兵影率ひて昨夜中より立ちて搦捕らせし且爾寢るは
兩人共は相貌言語山賊は類せぬ折も彼標吉は養母黒菟を悪僧
塞玄は撃れ當坐は母の仇を殺して今朝もあは訴来つる退りて
ありしは竊に標吉を閑室に召入れし吉見履のふと向ふは渠再三
陳れども證據分明なれば脱るは辞なく云云の故をゆく昨夕
冠者を山越に延しとてかへとやうなく実をせしは逆標吉は和殿
ホを透見させ冠者は相違ありと問へ是は脱る所なくして落涙
敬行は及びしが相従へる一人は某の事ぞ知らぬといへる骨相書とて
案びつよは必廣光あるん冠者を慕ふこの地は来り昨夜は山
山中あり再會せし疑ありとひはなれば和君達の傳を釋放させし

肺肝を告るとの冤枉を憐れ元晴元来秀衛が一族は録倉殿の
譜第は判官殿の恩義ありより子共兩人
進らせり又蒲殿の義経の舎兄なれば吾縁あるれば怨もあく恩も
かく義もあつたあつたわもども彼昌甫が頻りはあつたあつた和君主は
搦来つとわつと面をさしてより更は愛憐の心あり叔姪の骨肉は現有懸
やく冠者の面影判官殿は似たりゆうり元晴子共を先喪て子孫の
為に謀るは由ありいづこの薄命の公子を舎藏せんとせんといふ
あつたあつたの如く只あつたあつたも館に潜びて時を俟てあつたあつたを保め
あつたあつたの後盾あつたあつた。とその赤心を告ぐ義邦はあつたあつたの廣光の
雀躍しく天子歡び地は喜び席を避く拜謝の送代は月来の艱難
苦勞を物たり時夏は隱匿諛言又義秀井平標吉は義あり信

ある侍の趣ありも告し元晴感嘆浅く成爲し親を改をけり。
且して元晴の掌を打鳴らせ豫くありをぬららん水草十郎昌甫ハ
田丸標吉をぬく縁頼のほらうよ来つ標吉ハ義邦の恙か死きて大に
歎び思ハば小藤を進りて元晴これとえたりと標吉郎汝當坐小
養母の讐塞玄を替へてこの賓客の口状と符合せりありてその咎
はくよ汝ハこの賓客ハ舊縁ありのあまが召く對面を許せしその旨
ぬると謝をばく義邦ハ坐と立ち廣光も共標吉がほらうよ来つ時昔
の後の信夫莊司が蔭に寓る縁由を密語バ標吉も亦黒教が柱
死のうを告より義邦すく嘆息しその仇討の速死を譽く廣光よ
引あはばば廣光ハ標吉が月来主君を介抱の歡びを述べよらん標吉も
亦廣光が主君を慕ふ忠心の空しくを稱く己を彼此會語やう

やくも果しく義邦ハ舊の坐よかへり主人ハ挨拶を元晴ハ莞ゆる
昌甫を召進へけ汝が危忽ハありこの人よ徳ありさればあるトの
翁が代りて當坐の牽出物せんとも刀を取て与へ昌甫羞く且
歡びらハ全く愆の功名をいへとも戴く腰よ帶れバ義邦廣光
共侶よ吾們が擲捕られ禍ハ現塞翁が馬となりとち笑く昌甫を
勞へ昌甫も改めく無二の志を示し秋の日既ハ傾げバ元晴ハ又
昌甫より對ひ標吉ハ夥兵ホよ送らせく駒形村へ廻し遣し彼
塞玄が亡骸ハ形の如くよ計る標吉が忠孝いへば汝ハ腹心
あまがかくハ機密をあらせもこれこの賓客の一件ハ勞漏をへり
叮嚀示せば昌甫ハ謹く肯を標吉ハ傳もバ標吉ハ恩を謝し
義邦廣光ハ別を告昌甫が後よ跟らる聴く退死即ハ元晴ハ

席せきを改あらたく義邦主よしかみ後のち酒食さかを勸すすめ是こゝより常つねに閑室けんしつに扶持ふぢと
深ふかく潛ひそせ近ちかく使つかひ男女おんなもその心こゝろをほさるほる食腹じふく心のしんれ
あまが絶とく他たへ漏もれととかかかかく又また元晴もとあはハ標吉ひょうきちが忠孝ちゆうかうの大
ううかぬを感賞かんしょうし渠かれが養母やうぼの忌いむ果はるはめめ一ひとつつて村長むらぢやうよ
せん他村たむらの民たみををととらら移うつしし渠かれが下したよよととせんせんとと愛あいするするあある
深ふかかりかりけけと。

朝夷巡嶋記全傳第三編卷之三終

